

越冬 雑記

笠井 和明

「最強寒波」がいくつも列島にやって来、例年になくとてつもなく冷たい新宿の路上となった今年の2月7日。あの時と同じよう寒かった。

いつもの通り早起きをし、前日に揃えた「献花」や「供え物」を持ち新宿駅西口地下に向かった。29回忌となる。

火災現場となり、4名もの仲間を亡くした、通称「インフォメ前」も、小田急本店を中心とする再開発で工事中の箇所も多い。都庁へ行くバス停も場所が変わり、あの独特な形をしたロータリーも噴水も今はない。車道は狭くなり、交番側と、京王、小田急側が、かつてのようスムーズに行き来できない。分断され、渡り廊下のようなエントランスとなり、かつてを知っている人は、そこでまずは戸惑う。今は西口と東口を結ぶ広い通路が出来、名物でもあった地上のバス停も閉鎖されたり、場所が変わったりで、選挙カーは止まれないし、群衆も集まれない。観光バス乗り場は「新宿バスタ」や「都庁下」に移動し、今はスキー客が「ガラガラ、ゴロゴロ」と足早に通り過ぎるだけとなった。

火災現場は直後の修復工事の後、ガラス張の広場となり、昼間は「物産展」や「矯正展」が開かれ、かつてのよう身体を休められる広場ではなくなった。通称の語源ともなった東京都の「インフォメーションセンター」（案内所）もその後、移転。今は「新宿バスタ」の中にある「案内所」が、その名残であろうか。「インフォメ前」は広場と云うよりイベント会場。今やそこで何が起って、そうなったかなどは誰も知る由もない。

そう言えば、西口地下から都庁へ向かう「動く歩道」が出来て、ちょうど30年でもある。幻の「都市博」で活躍するはずだったこの設備、巡り巡ってホームレス排除のために使われるとは思ってもいなかっただろうが、今日も歩きたがらない

都庁の職員を乗せ、必死に動いている。ちなみに私は一度も乗ったことはない。そこを通り過ぎる度に、大人げなく唾を吐く。あの時の恨みは生涯消えるものではない。

「動く歩道」の建設を名目にした以上、その工事対象の4号街路以外は「排除」は出来なかった。行政は、色々とかこつけて、本当の目的を隠すのには長けている。その裏をかいて「インフォメ前」は、収容施設への移動を拒否した人々が、多く着の身着のまま集まった。これは東京都にとってみても思わぬ誤算であった。貧者の生活や居住への希求と云うものを過小評価した結果で



もある。家がなければ作る。その能動性は私たちがさえ驚愕する程であった。見事なまでに半年も経たぬうち「インフォメ前」には100名以上が暮すダンボールハウス群、「村」が誕生した。

そして、その「村」は、失火による火災で崩壊し、自主退去を余儀なくされた。ま、火災がなくても自壊しただろう。それだけ楽しくもあったが、酷くもあった。

「ダンボール村」なんて云う言葉は発展途上の負の言葉でしかない。そこには希望はなかった。外部の者達がチャホヤするだけの場でしかなく、それに振り回され続けた。

今年はミラノで冬季オリンピックがあり、7日土曜日がその開幕式であったが、28年前は長野オリンピックの開幕式の朝でもあった。今と違ってシンプルな競技ばかりで、スキージャンプの「日の丸飛行隊」が盛り上がっていた頃である。他方でオリンピックと云えば、「警備」強化である。警察はピリピリしている。そんな日の朝に新宿のど真ん中で大火事を起こしたものだから、上層部も激怒。「そんな危ない人々を駅前に置いとくわけにはいかない」と云う話しにもなったようだ。

防火素材ならまだしも、燃えやすいダンボールを材料に小屋を乱立させたのだから、どうみても「非」はこちら側にある。しかも中に石油ストーブなどを持ち込んでいたら、火災だけでなく一酸化中毒の危険もある。寒いから「たき火」をすると云うのは古くから人々の風習であったが、「寄せ場」でさえその風習も少なくなった

頃、そんなことを都心部でやられたらたまったものではない。

事実、その後の聞き取りなどで、その原因は石油ストーブからの引火であることは分かっていた。放火説をあえて唱える「陰謀論者」もいたが、そうではないことは現場に居た人々はだいたい知っている。この強いられ、放置された「村」は「失敗」だったのである。

単に懐かしがるだけでは4名の仲間を弔えない。96年の「強制排除」から「ダンボール村」に至る経緯の中で、その「必然」があったのである。「火の用心」一般ではない。「悲劇」一般でもない。運動を作り、運動から発した「責め苦」を我々は背負い続けている。

「鎮魂の旅路」は今も続いている。

午前5時、京王線の始発に向かうまばらな人々を避け、いつもの柱の下に祭壇らしきものを作り献花。一分間の黙祷。共に再会を祝しワンカップで献杯。死者と二言三言語り合う。それだけで、この式典は終わる。

通り過ぎようとしていた若いカップルが何気に手を合わせてくれた。あの頃には生まれてもいなかっただろうが、ここで生きていた人がいたこと、そして非業の死を遂げた人がいたことを感じてくれたなら、それだけで浮かばれる。

「ここで生きてきた。だから、これからも生きる」



.....
遡って昨年12月、高田馬場の事務所に10数名の仲間が集まり、酒を飲み飲み氣勢をあげる「クリスマスパーティ」が開かれた。これが今や「25-26新宿越年闘争」の総決起集会。

機材係の岡ちゃんが倒れ、コック長の太田さんが亡くなり、その他の仲間も諸々ありと、今期のシフトはととても大事。一人でも欠けると物事が動かなくなるもなる正念場。なのでこう云う「親睦会」もとても大事。酔っぱらって「基調」も「情勢」も「意義」もへべレケになってしまうが、そこはいつものメンバーは既に承知。何も言わなくとも、それぞれの役割は分かっている。そんな不思議な組織が連絡会でもある。

最近は路上酒禁止、年末なのに毎日やらない、飯も炊かない、物品だけなど、コロナ以降、路上支援活動界限も何かと変わった。出来ることをではなく、それが必要だと思ったらトコトンやる。人が居なくても、金がなくても、借金してまでもやる。冬とのたたかいは、それぐらいの覚悟を持って臨まないとならない。そんな昭和の時代の古い組織が連絡会でもある。

「新宿越年越冬闘争」は底辺下層労働者の拠点闘争である山谷や釜ヶ崎など寄せ場の冬のた

たかひに範を取り、それをバブル崩壊後の「路上生活者版」としてアレンジしながら、形を変えながらも毎年続けている。冬のたたかひは我々の主戦場でもある。そして冬のたたかひは生きるためのたたかひであり、厳しいなかでも仲間を思いやり、団結を強化していくたたかひでもある。たとえ路上の仲間が少なくなっても、時代が変わってもそれだけは変わらない。

今期の年末年始は暦の関係で、日曜日から日曜日までの8日間。寒い時は暖かいものをと、馬場ハウスの調理場で米を炊き、具を作り、保温をしながら車で公園に運び入れる。車両は2トントラック箱車を一週間レンタル。これを物資車両にし、人の関係はNPO新宿の軽バンを使わせてもらい、これでスタッフを往復させたり、夜のパトロールに使ったりする。

今の新宿は、かつてのような「公園拠点」「常駐」での越年ではなくなり、昼から夕方まで公園の一角で「相談」「衣類・毛布等配布」「炊き出し」を集中的に行ない、夜はそれぞれ路上パトロールに出、遠方の仲間は高田馬場に泊まりながら越年の活動を集中的に行なう形となっている。新宿の仲間は夜はそれぞれの寝場所に帰る。寝場所がない仲間は毛布やら必要なものを渡して、皆と一緒に地下広場などに寝てもらおう。そんな活動が28日から、役所が開所される翌5日まで、延々と続けられる。メリハリは大晦日のイベントぐらい、あとはひたすら地味な活動である。

公園には昼過ぎから三々五々、仲間が集まってくる。本部テントを建てると、「献立表」を見せると、今日のチラシに人が群がる。けれど「献立表」は残念ながら公表していない。知りたい仲間にはこっそりと教える。あまり公表すると「ただより怖いものはない」ので、関係のない人々まで集まってしまう。連絡会の炊き出しは、味が良い。質も高い。うまくいけば2杯は食える。そんなコアな情報は仲間内で共有していれば良い。本当に必要な人々を食の面で励ますのが目的なので、自分で食える人の分までは作らない。

あまりに堅苦しい場は作りたくはない。整理券配ってなんてのはとても嫌である。何時間も前から順番とって、この寒空の中で待っているのも、これも酷いものである。待っている人にはカイロ類を渡す。列は直前まで作らせない。本部に集まるご祝儀のお酒は、すべて仲間のもの。こっそりとコップを渡して身体の中から暖まってもらう。冬の酒は身体を温めるもの。お酒を飲むと追い出される「炊き出し」の場もあると

のこと。民間だ、ボランティアだといひながら、まるで役所と一緒にいるところも多い。まあ、人が集まると、様々なトラブルが想定されるものであるが、イベントを打ち、ハロウィンなどで人を集めておきながら、しまひには「来ないで下さい」と云うどこかの区のレベルと同じでもある。

そうしないために情報統制も必要であり、また、工夫も必要である。カメラを持ったものはマスコミにしてもユーチューバーにしても減多に立ち入らせない。「人権活動家」だとか「人権ボランティア」だとか、そう云う肩書きが欲しい人は、カメラを連れて別の団体のところで「出来レース」のよう、やってくれ。知ったかぶりの者には、今の状況は理解も解明も出来ないと思うが、世間がそれを求めているからなのか、いつも単純な物語にしたがる。

冬の路上は仲間だけのもの。そこでひたすら耐え、必要なことは何でもしながら、そして活用しながら生きていく。

炊き出しなんぞ毎日やっているが、たかが一食だけ。人は一日3食は食わなければならない。その一助になっただけ。なので、炊き出しやって、いかにも支援してますと豪語している人も、何かがちょっと違うのであろう。

年末のイベントは、ここ数年、人が少なくなったのと同時にこじんまりと、けれど何だか洗練されたのか、それとも酒が入るからか、やけに盛り上がる宴に毎年なる。玉三郎や桃山さんが亡くなっても「さすらい姉妹」の皆さんは新宿に懲りもせずに来てくれる。コマまわしの「コマたん」のパフォーマンスもこれはもう世界レベ



新宿の活動のことは義弟に話したこともないが、何だか知らぬ内に、どこかつながっていたようである。遺品からすると、彼の興味は「釜ヶ崎」にあったようで、その昔、一時期京都に暮していたので、もしかすると現場にも足を踏み入れていたかも知れない。パソコンの中にあつた大学の授業の資料には、野宿者の排除に抗議するかのようなものもあり、そんなことも生徒に伝えていたのであろう。被差別部落の資料もあつたりして、人権感覚はしっかりとあつたようだ。母方が会津の方なので、その反骨の精神も引き継いでいたのであろうか？

書籍の一番前には、読書中だったのであろうか、壇一雄の「家宅の人」が横にして置いてあり、その後ろには宮沢賢治全集がずらりと並ぶ。芥川龍之介のお弟子さんや佐藤春夫や大宰治につながる、医師であり詩人であり評論家でもあつた林富士馬と交流し、彼を師と仰ぎ、伊藤静男を研究し、呉智英や江藤淳からもらった色紙が飾られた部屋で愛犬と共に文学とは何かを、日々思索し続けて来たのだらうと思うと、その早すぎる死に目頭が熱くなる。

出世欲のない学者は、おうおうにして生活力が足りない。必要な連絡はしてこない。無頼派よろしく酒におおばれる。それが欠点であつたが、おそらく死んだ本人が一番驚いた最期になつたであらう。

「寄せ場」の人々に興味をもつた、そんな学者先生が割と近くに居たことが、ひょんな発見であつたが、その世界とは決して無縁ではない私が諸事を計らつたことで、少しは供養になつたかも知れない。

いつか「日本文学」と「寄せ場」を結ぶ物語や論文を読んできたかつたが、それは叶わぬ夢。

.....

「死」の話ばかりで、恐縮。

何か希望となるような話しはないのかと言われそうであるが、それがなかなか見当たらない。希望をもって生きていけるのは若き頃だけ。何度も挫折を繰り返し、失敗を繰り返して来た者は夢などは持たない。

何だか立派そうな活動の「裏側」はこのように「真っ暗」でもある。誇るものなどなにもなく、それこそ人を論ずるのが、はばかれる、そんな「闇黒史」でもある。

が、書かなければ「闇黒史」にもならない、そこで生きて来た者を、必死で生きて来た仲間を、忘れないためにも、こんな雑記を書き溜める。

『「日本残酷物語」〈現代篇〉』（1961年）の「不幸な若者たち」が、その後の高度経済成長の中、どうにか生き残つたもののバブルがはじけ、結局、不幸な路上に至つたのがホームレス問題とも言える。歴史と云うものはどこかつながり繰り返される。底辺下層もまた同じく。その編集者でもある民族学の偉人宮本常一の代表作は「忘れられた日本人」（1960年）。その後書きにはこうある。「一つの時代にあつても、地域によっていろいろの差があり、それをまた先進と後進という形で簡単に割り切つてはいけないのではなからうか。またわれわれは、ともすると前代の世界や自分たちより下層の社会に生きる人々を卑小に見たがる傾向がつよい。それで一種の悲痛感を持ちたがるものだが、御本人たちの立場や考え方に立つて見ることも必要ではないかと思う。」

辺境の地でも、橋の下の乞食暮らしであらうと、そこには、懸命に生きて来た人々の歴史があり、力がある。それを肯定したところから、なにごと始まる。その人が生きていたことを忘れてはならないし、その力から学ぶことを怠つてもならない。

「同情」を「武器」に世間に媚びているようでも、そこにはしたたかさが宿っているし、そのしたたかさを知つたとしても、それを咎めることはしたくもない。それこそが生きる知恵である。

主体はそんな甘っちょろい「ロマン主義」。対象者はその先を行き、好き勝手放題。

しかし、それで我らの関係が成り立っているのであれば、まあ、それはそれで良いと思つたりもする。

「不幸」の源流を辿つてみたくなり「羅生門」を何度も読む。

底辺下層に「救し」はあるのだろうか？

(了)



越冬期 巡回 おにパト報告

越冬は前半は穏やか、年が明けて後半が例年以上に寒さが厳しくなりました。巡回活動では、その前半部分で毛布、防寒着を大量に配布。新宿区の施策も活用しながら冬を越そうと呼びかけまわり、後半はとにかく「耐えよう」で、ホカロン類を大量配布。もちろん「おにぎり」を持参しての「おにパト」もしっかりと行ないました。実数的には新宿周辺地域で、だいたい150名前後。極限に寒くなると、なけなしのお金でネットカフェにでも行くのか、人数も減り、寒さが和らぐとまた戻って元の数字になると、そんな繰り返しです。年末の新宿区による「厳冬期宿泊」は例年以上の希望者が集まるなど、例年の冬とは少し違う展開ともなり、実態はより把握づらくもなっています。野宿出来る場所も「再開発」の影響などで限られています。心無い「苦情」で管理者が動いてしまうことがあります。それでも新宿は多く仲間が集まる場所でもあります。仲間を孤立させることなく、パトロールでつなぐ作業を続けて行きます。

おにぎり巡回パトロール 11-2月越冬期実績

		都庁	西	公園周辺	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
						(前年同月比)	(前年同月比)				
2025~ 2026	11月2日	59	21	8	44	132					
	11月9日	50	13	10	40	113					
	11月16日	57	20	10	45	132					
	11月23日	61	12	10	42	125					
	11月30日	62	19	12	46	139					
	11月平均	57	17	10	43	126 (+12)	13	11	150 (+17)		
	12月7日	61	21	13	47	142					
	12月14日	41	20	12	42	115					
	12月21日	54	22	9	39	124					
	12月平均	52	21	11	43	127 (+6)	11	11	149 (+9)		
	1月11日	45	14	9	34	102					
	1月18日	60	25	10	43	138					
	1月25日	55	20	11	47	133					
	1月平均	53	20	10	41	124 (+30)	12	10	146 (+35)		
	2月1日	58	20	10	46	134					
	2月8日	44	19	9	41	113					
	2月15日	45	15	11	37	108					
	2月22日	49	15	10	41	115					
	2月平均	49	17	10	41	118 (+17)	11	10	139 (+18)		
									4ヶ月平均	146(+20)	

深夜巡回（パトロール/軽食配布、毛布配布11月より2月 越冬期）活動で出会った仲間の数

2025-2026	日時	天候	4号街路	都庁下周辺	西口地下	西口地上	東(御苑含)	大ガード周辺	新南口周辺	深夜計
	11/9-10深夜	雨	31	14	53	16	2	4	25	145
	11/23-24深夜	晴	34	19	52	18	2	4	22	151
	12/14-15深夜	晴	30	17	56	20	2	7	23	155
	12/28-29深夜	晴	26	14	50	19	2	7	20	138
	1/2-3深夜	みぞれ雪	24	16	47	17	2	6	23	135
	1/4-5深夜	晴	28	19	57	19	2	7	20	152
	1/25-26深夜	晴	31	19	52	14	2	8	17	143
	2/8-9深夜	曇	25	18	58	15	1	5	16	138
	2/22-23深夜	晴	26	22	55	13	2	3	20	141
									平均	144名 前年比-8名

医療班越年期活動報告

今年度越年期活動中、医療班として以下の健康相談活動を行った。

参加ボランティアは7名、医師4名、歯科医師1名、薬剤師1名、一般1名であった。

医療班対応総数（延べ数）は86名、血圧測定15名、診察3名、紹介状2名であった。

12月28日（日）

*夜～深夜パトロール 21時30分～23時30分

参加者：1名 歯科医師1名

対応者：21名、血圧測定1名、診察1名、紹介状0

12月31日（水）

*中央公園机出し相談 14時30分～18時

参加者：4名 医師2名 歯科医師1名 一般1名

対応者：30名、血圧測定6名、診察1名、紹介状0

*都庁下夜間パトロール 21時から

参加者：1名 歯科医師1名

対応者：1名

*新宿駅西口地下ロータリーパトロール 23時から

参加者：1名 歯科医師1名

対応者：1名

1月3日（土）

*中央公園机だし相談 14時30分～18時

参加者：5名 医師2名、歯科医師1名、薬剤師1名、一般1名

対応者：33名 血圧測定8名、診察2名、紹介状2通

診察の主な内容

*息切れ症状の治療継続中、診療内容の相談 正月明け再診予定あり

*高血圧・喘息治療中断治療再開のための紹介状記載 1月5日福祉へ

*不安定歯の疼痛強度 歯科受診のための紹介状記載 1月5日福祉へ



医療班 大脇甲哉

新宿連絡会 会計報告

この冬期も多くのご寄付、ありがとうございました。とりわけ毛布の寄付はとても助かり、多くの仲間が凍えずに済みました。防寒着類、また、炊き出し、パトロール用のお米、野菜なども多く頂きました。寄付金もたくさん集まりました。余すことなく、仲間のために使い切るよう、活動に力を入れることが出来ます。

本当にありがとうございました。

冬は終わりますが、連絡会の日常活動は続きます。通年での活動となります。引き続き、季節ごとの衣類やアメニティなど生活物資の寄付を募っていきます。気に掛けて下さる皆様方が、まだまだ居ることはとても心強いものがあります。皆様方のお力が頼りです。小さな力でも、それを大きくして行きます。

引き続き、ご支援の程、宜しく申し上げます。

2025年度 11月～2月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		2 管理費	
1 寄付金収入	1,851,180	旅費交通費	0
		通信費	39,780
計上収入合計	1,851,180	消耗品費	3,420
		事務用品費	18,982
II 計上支出の部		事務所費分担金	120,000
1 事業費		衛生管理費	4,022
おにぎり/炊出し事業	262,829	支払手数料	76,356
巡回活動費	205,802	車両費	16,535
農業支援事業費	0	修繕費	0
越年越冬事業費	1,710,933	計上支出合計	2,907,442
その他活動事業費	448,783	計上収支差額	△1,056,262
		前期収支差額	2,462,351
		次期繰越金	1,406,089

●活動カンパ

振込は 郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10-106号NPO新宿気付「新宿連絡会」宛てでお願いします。